

患者に光歩み50年

仙台市泉区のJCHO仙台病院が昨年10月、腎移植通算1000件を達成した。東北・北海道地区の医療機関でトップの実績。前身の仙台社会保険病院の時代から腎移植・腎不全治療では定評があり、関係者は「今後も腎不全患者の一筋の光であり続けるとともに、臓器移植に対する国民の理解を深めていきたい」と意気込む。

ドナー不足今も課題

仙台社会保険病院は1976年に1例目の腎移植手術を実施した。これを機に病院は結核治療中心から腎疾患治療中心にシフト。連続携行式腹膜透析（CAPD）仙台カテーターの開発者で知られる石崎允医師（2009年死去）が中心となって腎移植を進めた。

現在は30～60代の移植外科医5人が手術を担当している。腎移植手術は、血管吻合、免疫抑制など高度な技術を要するが、同病院では長年培ったノウハウを生かして術後管理も徹底。術後5年で移植腎臓が正常に機能する5年生着率は90%を超しているという。移植件数は今年1月末現在で1008件になった。

移植外科医長の阿佐美健吾さん（49）は「移植チームではコミュニケーションを大切に



腎移植手術を行う医師たち（JCHO仙台病院提供）

院（青森県弘前市）などが実施している。圧倒的に実施件数が多いJCHO病院への評価は高く、東北中から患者が集まる。

かつては慢性腎臓病（CKD）が進行し、透析治療を長年続けた末に移植を受けるケースが多かったが、最近は透析開始前の移植が増え、20～30代の若年患者もいるという。「1回当たりに3～4時間もかかる透析治療に比べ、腎移植はその後の生活を考えれば有効な手段だ」と阿佐美さんは強調する。

国内でネックになっているのはドナー（臓器提供者）の少なさ。特に「脳死」と「心停止」を合わせた献腎移植は、2010年の改正臓器移植法施行で提供ルールが緩和された後も伸び悩んでいる。そのため、親族から提供される生体腎移植が主流になっている。同病院でも85%が生体腎、15%が献腎だという。

献腎移植を待つ全国の移植希望登録者数は25年12月末現在で1万5043人で、年間1～2%しか移植を受けられないのが現状だ。

阿佐美さんは「先進国では献腎移植が圧倒的に多い。家族で臓器提供について話し合える機運が盛り上がってくれば」と願う。

（佐藤克弘）

している。失敗例もなせうなつたのか、みんなで情報共有し、次に生かそうと心がけている」と話す。宮城県内で腎移植を実施しているのは、同病院と東北大病院（仙台市青葉区）だけ。東北では弘前大医学部付属病

JCHO仙台病院 腎移植1000件突破